

2018年経済学史学会大会報告レジュメ

論題：アリストテレスのコイノニアからマルクスのインテルムンディアへ
(From Aristotle's *κοινωνία* to Marx's *intermundia*)

報告者 神武庸四郎

[注意：大会公式報告レジュメの紙幅制限により省かれた部分は以下ではすべて元通りに復元されている。]

I 序—問題の手がかり—

アリストテレスが *κοινωνία* (コイノニア、共同体あるいはコミュニティ) のなかでおこなわれている経済活動として説明している諸財の交換とマルクスがインテルムンディア (*intermundia*、マルクスはこのラテン語をドイツ語表記で *Intermundien* と記している) のもとでおこなわれていると想定した商品交換とのちがいをあきらかにして、いわゆる「価値論」の論理的内容および貨幣と「資本」の概念を理論的に再構成したいというのが、私の報告の課題である(コイノニアとインテルムンディアとのイメージによる区別については、付図参照。また、両者に社会システムとしてのゲマインシャフトとゲゼルシャフト、あるいはコミュニティとソサエティを対応させることもできよう。文献[3]を見よ。)。もっとはっきりいえば、「価値論」を介在させないでマルクスの「資本」概念を論理的に構成できないか、ということである。なぜこのような課題設定を思いついたかという、その理由はかつて福田徳三の手がけたアリストテレス研究ならびにそこからかれの導き出した「共産原則」と「費用原則」との対比にもとづく理論展開がマルクスの「価値論」に対して根本的に批判的な意味をもつという確信をえたからである。福田がマルクスのアリストテレス解釈のまちがいを忌憚なく指摘したためであろうか、かれの提示した批判的視点はその後ほとんど顧みられることはなく、のちに独自の「価値論」解釈を打ちだした諸労作、とくに安部隆一の『『価値論』研究』([1])においても、宇野弘蔵によるマルクス「価値論」の批判的再構成の試み([2])においてもまったく取り上げられることはなかった。安部の議論はマルクスの「価値論」における「使用価値」概念—したがって、マルクスの度外視した商品学の意義—および「生産力」概念の重要性を鋭く指摘したものであるが、それはマルクスの議論を基本的に肯定しており、批判的論述を積極的に展開するまでにはいたっていない。他方、宇野はマルクスの用語法に依拠しつつも独自の論理構成を提示して「価値論」を自己流に叙述してはいるが、商品交換が「共同体間」に発生して「資本」の原初的な成立にいたる過程についてはこれを十分に論述しているとはいえない。じつは、福田の視点を「資本」に関連したアリストテレスの概念整理にまでおよぼすことにより、「資本」の概念にとって必要な商品交換の独自性があきらかになるのである。もとより、その種の交換、すなわち営利交換([3]参照)が成立することの説明をアリストテレスがおこなっているわけではない。かれが、とりわけ『ニコマコス倫理学』において「交換」の事例として取り上げ

ているのはコイノニア内部の財交換のかたち(「共同体内分業」)であって、「共同体間分業」についてはおもに物々交換(バーター)が指摘されているばかりである。営利交換、したがって商品交換を理論的に説明するためには、19世紀になってリカードが案出したいわゆる「比較生産費」のロジック、あるいはそれをさらに抽象化したハロッドの「生産費比較」の理論がどうしても必要になってくる([12]および[20]参照)。

ところで、共同体内分業とか共同体間分業とかいう日本語表現に特有の歴史的・情緒的な煩わしさをできるかぎり回避するために、本報告ではコイノニアもインテルムンディアもそのままカタカナ日本語として使用することにする。両者は空間的には密接不可分に関連しているが、そこで展開されている諸経済行為のかたちには明瞭なちがいがあある。経済システムという観点からすれば、両者がそれぞれ社会主義と資本主義とに、ケインズの用語法にそくしていえば(*)、「協同経済(co-operative economy)」と「企業者経済(entrepreneur economy)」とに対応していることは行論のうちにあきらかとなろう。この区別をひとまず念頭に置いたうえで、マルクスがかれのいう「価値形態」および「資本」の概念構成にあたって決定的な個所で引用を試みているアリストテレスの所論を検討し、そのうえでマルクスの想定したインテルムンディアにおける交換の独自性を一般的な「価格比較」の観点から掘り下げ、いわゆる「価値論」を経由せずに計算貨幣と商品貨幣という2種類の貨幣の区別ならびに、「資本」の概念、より正確にいえば、 $G-W-G'$ 図式でしめされる営利交換の概念に到達する、といった順序で議論を展開させてみたいとおもう。ちなみに、ケインズもまたこの図式(英語の表現では、 $M-C-M'$)を「企業者経済」の決定的なメルクマールとして重視し、そうした側面からマルクスの貢献を高く評価していることは周知の事実であろう(**)。

(*) [14]p.76 以下の議論を参照。かれはまた、じっさいに資本主義システム(capitalist system)という表現をもちいているが、これはとくにマルクス派の立場に言及するばあいの特別の表現とおもわれる(*Ibid.*, p.82n)。

(**) ケインズはつぎのように語っている。「協同経済と企業者経済との区別はカール・マルクスがおこなった含蓄のある観察とかかわりをもっている。もともと、この観察にひきつづくかれのやり方はきわめて非論理的であったが。かれはこう指摘している。現実界の生産の性質は、経済学者がよく想定しているように見えることだが、 $C-M-C'$ 、つまり商品(または成果)を、いま一つの商品(または成果)を手に入れるために貨幣と交換する事例にはあたらぬ、と。それは私的な消費者の立場であるといえよう。だが、それはビジネスの姿勢ではない。ビジネスは $M-C-M'$ に該当する。つまり、商品(または成果)にたいして貨幣を手ばなし、さらに多くの貨幣を得るのである。」(*Ibid.*, p.81)

Ⅱ アリストテレスのコイノニア内交換論

(1) 問題の所在

周知のように、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』の第 5 巻において、かれが家政術(オイコノミケー)と称しているものの立場からコイノニアのなかでの交換およびその例証を解説している。このばあい「術」はテクネーを意味している。ここでかれは交換を取材術または貨殖術(クレマティスティケー)の立場から論じているわけではないことに注意しておく。

ところで、かれがコイノニア内部の交換に共通の基準と見なしているのはクレイア(需要量)であることに注目しておきたい。というのは、それをマルクスが「労働量」と見なしたことから、たとえば岩波文庫の邦訳に対して補われている注釈においてもこの解釈が踏襲されているからである。ヨーロッパ古代の経済思想に造詣の深かった経済学者高橋誠一郎は正当にもつぎのように指摘している。すなわち、「アリストテレスは、一切の生産物が量定せらる可き共通の標準を以って、需要($\chi\rho\varepsilon\iota\alpha$)なりと観たり」とかれは解しているのである([6]、120 頁)。当面の課題は高橋のばあいとおなじ立場からアリストテレスのコイノニア内交換論の理論的な解釈をこころみることにある。いまひとつ、このコイノニア内交換論についての解釈において逸すことのできない論点を提示しているのは福田徳三である。かれはつぎのように論じている。

「単なる均等報酬の原則とアリストテレスの名くるもの、其れは即ち費用原則であり、所謂交換原則であつて、ア氏は明かに、其の比例的報酬の原則を、之れと対抗せしめてゐるのである。匡正の正義と配分の正義とを対立せしめ、前者は算術的比例に従ひ、後者は幾何的比例に従ふとし、流通の正義も亦た幾何的比例に従ふものだとしたのは、更らに此の対抗を明瞭ならしめたものである。費用原則は、匡正の正義に属し、算術的比例に従ふ。共産原則は流通の正義に属し、幾何的比例に従ふ。」([7]、145 頁)

福田はこのようにアリストテレスの議論を正確に要約し、マルクスがアリストテレスの議論を誤解して「共産原則」を「費用原則」と取りちがえている、という正しい認識をしめしている。とりわけアリストテレスの例証をマルクスは曲解しているとする福田の指摘はきわめて重要である。

以下の議論でとくに問題となるのはアリストテレスのあげている二つの例証である。それをさらにいっそう広い視角から解釈しなおす可能性を探求しようとおもう。

(2) アリストテレスのコイノニア内交換論

以下にあげるアリストテレスの仮説例はマルクスが「等価形態」を論じる際にとりあげているものである。[なお、本文の引用は Loeb Library の対訳本と日本語訳を参照した([10]による)。]まず、その検討に移ろう。かれはこういう。

比の理論—「幾何的比例」—にかんするエウクレイデスの定式化にならったものである。];

$$3 A = 2 B \text{ ならば } 3 \Delta = 2 \Gamma \cdots (i)$$

$$3 A > 2 B \text{ ならば } 3 \Delta > 2 \Gamma \cdots (ii)$$

$$3 A < 2 B \text{ ならば } 3 \Delta < 2 \Gamma \cdots (iii).$$

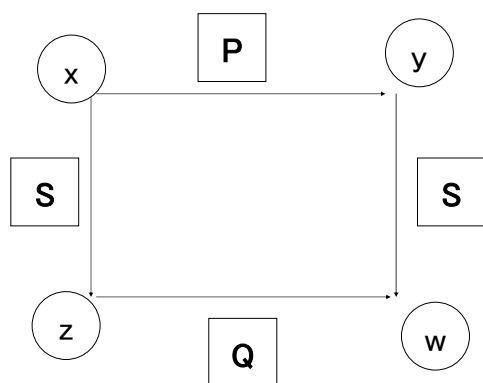
これらのうち、(i)式に収斂するような4項演算がコイノニアの「単純再生産」(コイノニア内部の閉じた社会的=計画的分業)をもたらすことになる。これは必要な変更をくわえて第二の4項関係にもあてはまる。ここにしめされている比例にもとづく関係(構造)は、バートランド・ラッセルが「相似性(similarity)」の「4項関係」(a relation of four terms)として特徴づけているものである([24])。それはコイノニア内部の分業関係に基づく交換、すなわち「応報の正義」にもとづく交換構造を、さらにいえば、需要におうじて生産のおこなわれる計画経済の分配構造を表現している(*)。したがって、その4項演算を商品交換における「価値形態」に結びつけて、すなわち2種の生産物の2項関係として、解釈したマルクスの議論はアリストテレスのいう「交換」の概念をとりちがえた謬論であろう。ここには交換利益も労働量による「価値」規定も介在してこないのである。それでは商品交換はどこでどのようにおこなわれ、営利交換にむすびつくのであろうか。

(*) [10]の訳者註において加藤信朗はコイノニアをその下位概念である「ポリス共同体($\pi\omicron\lambda\iota\tau\epsilon\iota\alpha$)」に限定して、それが成立する条件である形相面での正義として「配分的正義」と「規制的正義」(福田のいう「匡正的正義」)を位置づけ、第三の「応報の正義」を質料面での正義と規定している。これは基本的に妥当な解釈であると、私はおもふ。この解釈からラッセルの「4項関係」図式の適用が可能になるのである。その数学的根拠をつぎにしめそう。アリストテレスの4項算法は、生産者Aとその生産物 Γ 、生産者Bとその生産物 Δ という4項の関係から、その算法(交換)の「解」としてコイノニアが生起する関係のことをさしている。4項を4元集合とみなし、4元集合の集合としてコイノニア(人間の集合と財の集合)を出発点(ドメイン)として交換関係をしめす有限個の数値の集合をコードメインとすれば、交換関係は一種の集合関数、したがって測度と規定されよう。それをアリストテレス測度—略して、 α 測度—と名づけておく(もっとも、ギリシャ時代には「実数」という数は存在しないから、ここで測度というのは代数的な測度=射を意味する。次節末尾の註***参照)。たとえば、1軒の家(Δ)と靴との交換がコイノニア内交換としておこなわれるとき、大工のクレイア(A)は10足の靴、靴工のクレイア(B)は1軒の家であるとすれば、このクレイアの差を決済するのがノミスマであると解釈される。すなわち、1軒の家と交換されるのは、たとえば[10足の靴+4ムナのノミスマ]である。マルクスの言葉をつかえば、「相対的」「実物形態(Naturalform)」がクレイアであり、所定の量の「実物形態」とノミスマが「等価形態」の位置をしめることになろう。要するに、アリストテレスのばあいには「実物形態」が正の有理数(交換関係)をさだめるという α 測度が想定され、これがエウドクソス流の量空間の「比」を規定する、という解釈が可能になる。し

かし、この解釈はアリストテレス自身のコイノニア認識を矮小化してしまうおそれがある。むしろ、ラッセル流の「関係の論理学」における「相似性」の論理に対応させて解釈したほうがアリストテレスの真意をいっそう正確に表現できるであろう。ラッセルの「相似性」論は集合ではなく関係のクラスにそくして議論がすすめられている。かれの用いた図(次頁)にしたがってその説明をつぎに引用しよう:

「P の場 (field) をドメインとし Q の場をコードメイン [原文の converse domain をこう訳すことにする。・・・引用者] とする関係であって、しかも、ある項がいま一つの項に関係 P をもち前者の相関者が後者の相関者に関係 Q を持つ—逆のばあいには逆である—ような、一対一の関係が存在するとき、二つの関係 P と Q とは『相似』として、あるいは『類似性』をもつとして定義することができる。x と y は関係 P をもつ二つの項としよう。そのとき、二つの項 z、w が存在して、x は z に関係 S を、y は w に関係 S を、そして z は w に関係 Q をもっているとする。x と y のようななどの項の対もこういうことになるならば、また、z と w のようななどの項の対にも反対のことが生起するならば、関係 P のなりたつかなる実例にも、それに対応して関係 Q がなりたつ実例が存在し、逆のばあいには逆がなりたつことはあきらかである。そしてこのことは私たちが定義によって確保したいとおもうことなのである。上の諸条件が実現されるとき、関係 P は S と Q との関係積 (relative product) および S の逆とおなじものであることを観察することによって上の定義の素描にふくまれる余分な事柄を消去することができる。すなわち、x から y への P ステップは x から z への S ステップ、z から w への Q ステップ、それから w から y への逆の S ステップの連続操作によって置き換えるのである。こうしてつぎの定義を用意することができる。S が一対一で、そのコードメインとして Q の場をもち、しかも P が S と Q との関係積および S の逆となっているようなものであるならば、関係 S は二つの関係 P と Q との『相関子 (correlator)』、あるいは『順序相関子 (ordinal correlator)』であるという」。([24] pp.53-54.)

かれの図にしめされている関係 P と Q を「射 (morphism)」、図の上段と下段を「圏 (メタカテゴリー)」として解釈すれば、S は「関手 (functor)」に相当することになるから、論理的には α 測度を用いたばあいと同等である。



Ⅲ マルクスのインテルムンディアにおける交換

まず、インテルムンディアについてのマルクスの記述にふれておこう。かれは『資本論』のなかで「交換過程」を論じるさいに商品交換は「共同体と共同体の間隙(Intermundien)」でおこなわれるとのべている。そして、この叙述より前に「間隙」について明確にふれている。ドイツ語では、...in den Intermundien der alten Welt と記されている。日本語でいえば「古代世界の間隙において」と訳されよう。ここに出てくる Intermundien については「エピクロスの神々」にかんする注釈のなかで Zwischenräumen(間隙)と同義としてあつかわれている。1976年の英語版『資本論』ではこの箇所が...like the gods of Epicurus in the *intermundia* というように訳されている。羅和辞典では *intermundia* (インテルムンディア)の訳語として「世界間空間」と和訳されている。訳語はともかく、文脈から推してインテルムンディアが上述の「共同体と共同体の間隙」に相当することはあきらかである。また、このインテルムンディアに商品交換、さらには「資本」の展開する場をもとめたマルクスの指摘はそのかぎりで正しいようにおもわれる。問題はその先にある。というのは、そこでなぜ商品交換がおこなわれるのか、さらに、本源的な「資本」がいかにしてそこに発生するのか、この問いにマルクスはまともに答えていないからである。じっさいに「価値形態」をいかに「展開」させようとも、「交換過程」の特徴をかれ特有の対辞(対語、a pair of words)によっていかに描こうとも、この問いへの答えは出てこないのである。むしろ、その手がかりをあたえているのはアリストテレスである。かれはこういっている([11]):

「商人術は財を作るもの、それも凡ゆる仕方によってではなくて、ただ財の交換によってのみ作るものである。そうしてこれは貨幣に関係あるものだと思われる。何故なら貨幣は交換の出発点であり、目的点であるからである。そしてさらに、この種の取財術から生ずる富には限りがないのである。」(下線は引用者による)

しかしながら、アリストテレスは「商人術」の成立する根拠までしめしているわけではない。すでに指摘したように、福田はマルクスがアリストテレスの「倫理学」を誤読しているとする主張をみずから、そのギリシャ語原文およびその解釈にかかわる研究史に検討をくわえることによって立証している。これはまさしくメタ経済学的方法態度といえる^(*)([4]参照)。かれはアリストテレスからマルクスを見て、いわゆる「価値自由」の立場からマルクスの議論の組み立て方に根本的な批判をくわえることができた。とくにアリストテレスが例証したのは、前述のように、「幾何的比例」にもとづく「共産原則」であって「算術的比例」にもとづく「費用原則」(＝労働価値説)に依拠するマルクスの議論とは根本的に異なっているとする指摘はじつに鋭いマルクス批判となっている。しかしながら、福田の「費用原則」にも問題はあつた。かれは、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』においてとりあげた算術平均の説明をバーネットの説を紹介するかたちで展開している。それは裁判官の判

決＝「正義」を計量する「費用原則」をしめすものとされている。いま、 Γ は $\kappa \epsilon \rho \delta \omicron \varsigma$ (利益)として評価した「不正」、 Δ は $\zeta \eta \mu \iota \alpha$ (損失)として評価した「加害」とすれば $(\Gamma + \Delta)/2$ が $\mu \iota \sigma \omicron \nu = \delta \iota \kappa \alpha \iota \omicron \nu$ (中間＝正義)に相当する。ここで、 $(\Gamma + \Delta)/2 = \Sigma$ とおけば $\Gamma - \Sigma = \Sigma - \Delta$ であるから、たしかに算術平均がなりたっている。しかし、この算術平均にもとづく「費用原則」からは営利の根幹となる損益計算が導かれることはない。なぜならば、 $\Gamma - \Delta$ 、つまり、純利益の観念がそこにあらわれてくることはないからである。したがって、また「費用比較」ないし「価格比較」による利益計算、その純粹型としてマルクスの創案した $G-W-G'$ という営利交換の範式の出現する可能性も出てこないのである。もとより、マルクスはマルクスで「価格比較」と営利交換との不可分のつながりを理解しておらず、その点ではリカードに劣っている。そこで、アリストテレスの記号法をそのままにして、純利益を導入し、 $G-W-G'$ をみちびくことにする。

いま、「商人術」の担い手である商人がインテルムンディアの2点と見なされるコイノニア α と β において営利を実行するものとしよう。インテルムンディアの「点」は空間座標の定まった地点を連想させるが、正確には時空座標を想定しなくてはならない。というのは、論点を先取りするかたちでいえば、以下にしめされる命題は論理的には、たとえば異種通貨の交換にさいしておこなわれるスワップ取引や同一商品の掛売買にもあてはまるからである。仮設例によって、意味のある $\Gamma - \Delta$ の成立する可能性をしめそう。2種の財 A、B についてコイノニア α と β のなかでつぎのようなかたちで交換(以下、→印であらわす)がおこなわれているものとする：

コイノニア	α		β
A	1	単位	1
B	X ($\neq 1$)	単位	1

ここで、二つのケースがかんがえられる。

- i) $X > 1$ のとき、 $X = 1 + Y$ (Y は正の有理数)をみたす Y がある。交換は①、②の経過をたどっておこなわれる：
- ① α で、A の 1 単位 → B の $(1 + Y)$ 単位 …… B の「買い」
 - ② β で、B の $(1 + Y)$ 単位 → A の $(1 + Y)$ 単位 …… B の「売り」
- ii) $0 < X < 1$ のとき、 $X + Y = 1$ (Y は正の有理数)をみたす Y がある。このとき、交換はつぎの③、④の経過をたどっておこなわれる：
- ③ β で、A の $(1 - Y)$ 単位 → B の $(1 - Y)$ 単位 …… B の「買い」
 - ④ α で、B の $(1 - Y)$ 単位 → A の 1 単位 …… B の「売り」

ところで、ここで想定した商人の目的は純利益ないし「譲渡利潤」である。「譲渡利潤」がなぜ得られるかをあきらかにしたのはリカードであり、かれの「比較生産費」命題を単純化し形式化したのは R.F.ハロッドである。周知のように、ハロッドはそれを国際経済学の「根本原理」として重視し、その著

書の最初で詳しく解説している。上述の仮設例にしめされている交換利益発生仕組みはまさしくリカード・ハロッド流の、「費用比較」—もっと一般的に「価格比較」—による「譲渡利潤」形成^(**)のそれと論理的には同値である。いずれにせよ、仮設例にしめされた商人の交換行為によって、いわゆる商業利潤が生ずるのである。その典型的なケースはAが貨幣(商品貨幣)であるときであり、マルクス流の表記法にしたがえば、G—W—G'である。

このように考えると、たとえば私が『経済史入門』([3])で「比較生産費」による営利交換の説明にさいして用いた「豚」と「米」はおのおのAとBに対応しており、またそれらを金と銀、あるいは異なる国家紙幣等々と入れ換えても論理的にはおなじことが成り立つはずである。いうまでもなく、このような推論の拡張は、経済的な理論命題よりもさらに一般的なコンテキストのもとで、ポアンカレ(Henri Poincaré)が命名した conventionnalisme(規約主義)の考え方である([19]参照)。数学者集団ブルバキが集合論の前提として導入した τ や \square の記号法はこの規約主義をさらに徹底させたものと見なすことができるかもしれない。この見方からすれば、リカード・ハロッド流の「比較生産費」の説明モデルは価格比較による営利可能性を説明する論理、さらには「一物多価」を「一物一価」に収斂させる過程の論理でもある。したがって、それは一般的に投機取引の仕組みを説明する論理でもある、という解釈がなりたつだろう。

しかし、「比較生産費」ないし価格比較のロジックはさらに昔にさかのぼる。ゲーテがかれの代表的な小説の中で「人間の精神が産んだ最高の発明の一つ」であると登場人物にいわせている複式簿記の原理である。これはマックス・ウェーバーが合理的経済計算の起点として重視したものである。「豚」と「米」を例にとって、借方と貸方による2項算法をしめそう。米を商品貨幣(Warengeld)—これは実質的にはマルクスが Geldware とよんでいるものに相当する—として利益の発生する「仕訳」はつぎのようになる:

(借方) 豚 1 頭 米 1.5kg ———	(貸方) 米 1.0kg 豚 1 頭 ——— 米 0.5kg.
---	---

ここでは「比較生産費」の計算が複式簿記の算法をもっておこなわれ、またこの取引「仕訳」の双対(次項参照)をとれば、豚が「商品貨幣」となる。ここに見られるのは2項算法であって、2項関係ではない。マルクスは「価値」と「使用価値」、「相対的価値形態」と「等価形態」といった対語(a pair of words)、すなわち、特定の2項関係を抽出して多様な反復的叙述を試みるばかりで、結局、リカードの提示したような、あるいは数学者が頻りに駆使するような—たとえば、デデキントが数直線を下端と上端とに分ける

「切断」というかたちで、「切断」と実数とを同一視したような—「算法」をそこに見つけることができなかつたのである。コント流に言えば、「価値」をめぐるマルクスの「推論」は「形而上学」の範囲内にとどまって、ついに「実証科学」の域に到達することがなかつたともいえよう。その意味で、コミュニティ内部およびコミュニティ間に生起する財交換過程のなかで、物々交換を超えて営利を可能にする交換、 $G-W-G'$ 図式が成立する商品交換を規定する理論的な根拠をしめせなかつたといつてよい。また、これまでの議論は結果的に、いわゆる「労働価値論」をまったく不要のものとするようになるであらう^(***)。

(*) メタ経済学というのは、べつのいい方をすれば、経済学を対象とする知識社会学—いますこし限定していえば、「視座構造の理論」(後述)—ともいわれるであろう。具体的な分析の実例としては[4]を参照。

(**) いうまでもなく、とくにリカードにおいては「費用比較」は別の交換「利益」をみちびくためのロジックとかがえられるべきであろう。すなわち、今日の「正統派」経済学において説かれている「機会費用」の論理である。「機会費用」にもとづいて量ないし測度ではなく有理数としての交換「利益」一般が論じられ、さらには国際分業の「利益」が喧伝されることになるわけである。

(***) マルクスの「抽象的人間労働」にまつわる実念論的なレトリックやその測定をめざす「社会的必要労働時間」というあいまいな時間概念からは「労働」と「価値」とをむすびつけるいかなる論理も出てこないであろう。「人間労働」を(自然)科学的に抽象化すれば物理的エネルギーに帰着するであろう。また、マルクスが労働(力)の測度として持ち出してきた「社会的必要労働時間」については、それによってなにが測られるのか、またそれを測るのはなにか、といった問題がただちに生じてくるだろう。その「時間」はあきらかに物理的時間を意味するのであるから、一般的な時空間のなかで概念規定がおこなわれなくてはならない。その空間は一種の測度空間でなくてはならず、またその構造を、たとえば代数構造として規定しようとするならば、カラテオドリがソーマ($\sigma\omega\mu\alpha$)と名づけたような測度代数(環)の構成される必要がでてくるかもしれない(C. Carathéodory, *Mass und Integral und ihre Algebraisierung*, 1956, 参照)。しかし、こうした推論からなにか経済的に意味のある理論がみちびかれるかどうかは定かでない。むしろ、価格比較一般と賃金比較の特殊性との対比といった問題関心のほうが社会的実践的に意味のある成果をもたらすのではなかろうかとおもわれる。

IV 結論的な命題の提示

これまでの議論を一応二つの命題にまとめておこう。

(1) アリストテレスはコイノニアにおける計画的分業と交換を、2種の需要量と生産量との4項関係の構造^(*)にそくして解明し、そこにおける計算貨幣(ノミスマ)の機能をあきらかにした。

(2) マルクスは交換利益ないし営利交換のおこなわれる場をインテルム

ンディアとして正しく把握したが、営利交換のおこなわれる根拠をしめすことができなかった。また、いわゆる「価値論」の用語法をぬきにしても、上述のように営利交換の論理的な根拠、さらに商品貨幣の双対的規定(**)を説明することは可能なのである。

とくに、今後の私の研究への展望を意識して(2)の論点をいいかえると、こういう具合になる。すなわち、イデオロギー論としてではなく、むしろ「視座構造(Aspektstruktur)の理論」([9], [15]参照)として提示されたマンハイム(K. Mannheim)の「知識社会学」にそくしていえば、マルクスの「価値論」は対象認識にたいし科学的に不適合な「視座構造」の表明でしかなく、その結果、かれはアリストテレスにおけるコイノニアの構造的説明の理解にも、またインテルムンディアに展開する営利交換の理論的認識にも成功しなかったのである、と(***)。しかし、他方で、マルクスが資本主義システム—「資本家的生産様式」!—の支配する現前の社会に向けた批判的パトスは貴重な知的遺産であり、粗削りながら直観的におこなわれたかれの構造分析はいまもなお有効性をもっているようにおもわれる。この点で私はジョン・ロビンソンのマルクス「批判」—とくに「労働価値論」無用論—のスタンスをとりわけ高く評価している(****)。

(*) 「構造」という言葉を私は三つの意味で理解している。第一に、構造はシステムの同義語である([3]参照)。第二に、それはブルバキが規定したように、三つの母構造(代数構造、順序構造、位相構造)から論理的に構成される数学的構造を意味する。レヴィ・ストロースが簡略化して使っている用語法(クセジュ文庫の『構造主義』参照)はこれである。また、岩波書店の『数学辞典』第3版(1985年)では、これに類したかたちで「構造」が解説されている。第三に、数学基礎論、とくにモデル理論のなかで用いられている「構造」がある。これは抽象的なレベルで「構造」をとりあつかうときには有用な用語法であり、上記『数学辞典』の第4版(2007年)ではこの立場から説明がなされている。本報告で私が念頭に置いたのは第一と第二の意味での「構造」である。私にとって「構造分析」は主として第二の意味を背景としたシステム分析にほかならない。またそれを実行するなかで、丸山眞男のいう「構造分析」と「歴史」との「緊張」([9]参照)が表現されるであろうと、私はかんがえている。すなわち、この「緊張」は、私がおりにふれて言及してきた歴史の構造化によって「緩和」されるのである。いまずし説明をくわえよう。周知のように、バートランド・ラッセルは哲学史を大胆に2分してつぎのように論じている。「ピタゴラスの時代以降、哲学においては、主として数学をその思想のおもな源泉とした人々と、経験的諸科学によってより多く影響された人々との間に、ある対立が存在してきた。プラトンやトマス・アクィナス、スピノザ、カントなどが数学派(the mathematical party)とよんでよいような部類に属するのであり、デモクリトスやアリストテレス、それからロック以降の近代経験論者たちは、それに対立する一派に属している。」([25]p.783,邦訳の821頁参照)と。丸山が「構造分析」を歴史的に新カント派哲学にひきつけて—そして、おそらくは構造主義を意識して—イメージしているところから判断すれば、「構造分析」はま

さに「数学派」を際立たせるキーワードともかんがえられよう。ところで、ラッセルが「数学派」という「学派」を設定して、なかば強引な哲学思想史の総括をこころみたことには、20世紀の哲学潮流を念頭においたとしても、あながち根拠がないわけではない。じっさいに、ライプニッツ(G. W. Leibnitz)が数学の概念を思い切って拡張し、それを「構想力の論理(la Logique de l'imagination)」として特徴づけ、また数学者のそうした「構想力」が、たとえば数学者集団ブルバキのように、ロゴスを論理として構造化するところまですすんできたこと、さらにブルバキの構造主義(ブルバキズム)が構造主義哲学一般の思想的枠組みにすこぶる大きな影響をおよぼしたことなどから判断すると、哲学の潮流としての「数学派」という名称は、すくなくとも思想史的な意味をもっているようにおもわれる。

(**) 前節の例解では、「双対」は二つの生産物の「位置変換」による命題の変換を意味するにすぎないが、「位置変換」をもっと一般的に—数学者がおこなうように—「射」と見なすならば、いますこし立ち入った議論が必要になる。

いま、対象 X を生産物、Y を商品、そして F は営利交換を意味する射としよう。このとき、

$$Y = F(X)$$

がなりたつ。この「双対をとる」ならば、

$$Y = X(F)$$

となるが、この式をどのように解釈することができるであろうか。F が「独立変数」となり、それを生産物が媒介して商品がつくられるという構造をそれは表現している。ここでは営利交換という関係(射)がいわば「自立化」して生産システムが資本主義システムに変化したのである。このシステム＝構造のさらに一般的な現れが疎外にほかならない。

(***) 「視座構造」にかんして用語法上の注釈をつけくわえておく。マンハイムはこういつている。すなわち、「虚偽化の疑惑はイデオロギーの全概念にはふくまれていないのだから、知識社会学における『イデオロギー』という言葉の使用にはなんら道義的あるいは告発的な内容があるわけではない。むしろ、それが指向しているのは、いつどこで諸社会構造が諸主張の構造に表現されるようになるのか、また、どんな意味で前者が具体的に後者を規定するのか、といった問題提起をみちびく研究関心である。そのとき、私たちは知識社会学の領域にあってはできるだけ『イデオロギー』という言葉の使用を、その道義的な含意ゆえに避けるべきであり、またその代わりに思想家の『視座構造(perspective)』について語るべきである。この用語によって私たちが意味づけているのは、主体が自己の歴史的かつ社会的な立場によって規定されていると認知するすべての様式である。」と([15] pp.238-9)。マンハイムの意図をかいつまんでいえば、知識社会学においては「イデオロギー」という用語の代わりに社会的視座構造という用語をつかうべきだということになろう。マンハイムの説明に忠実な私たちで、「歴史的社会的視座構造」と解釈することも可能だが、そうしなかったのは、歴史という概念を用語法に導入することにより用語としての「視座構造」の輪郭がかえって曖昧になるとかんがえられるからである。この論点は、丸山眞男が指摘しているように([9]参照)、歴史的「発生」の二類型の区別や思想の「遠近法的な

位置づけ」といったマンハイムの用語法によって濾過されるべき厄介な方法上の問題に抵触してくる。ここではその問題に深入りせず、以下の例証を簡潔に説明するために、ひとつの用語法を導入するだけにとどめる。すなわち、社会的視座構造としてのイデオロギーが社会性を喪失するばあい、その状況をここでは「脱イデオロギー化 (de-ideologizing)」とよんでおく。

さて、このように用語法をさだめたうえで、つぎにメタ経済学的な例証をこころみでおこう。貧弱な「視座構造」あるいはイデオロギー不在の「経済学」についてジョン・ロビンソンがみごとな論評をくわえていることは周知であろう。かれはこう論じた。「社会科学的思考の世界からイデオロギーを排除することができても、できなくても、イデオロギーは、社会生活上の行動の世界においては、確かに不可欠なものである。社会の構成員が社会の諸問題を処理するための適切な方法が何であるかについて共通の感覚をもち、そしてこの共通の感覚がイデオロギーによって表現されて、はじめて、社会は存在しうる。」と。([22], 6 頁)ここでロビンソンは経済学をこえた社会諸科学のイデオロギー性を的確に把握している。引用文中でつかわれている「イデオロギー」を社会的視座構造に置きかえても、もちろん、この主張は有効であろう。そうした言葉の理解をふまえていえば、イデオロギーでない「経済学」(たとえば、サムエルソンにはじまるアメリカ「数理経済学」のかなりの部分、あるいは行動生態学を模倣したゲームづくりの「経済学」)も多様なかたちで出現しうることになる。この種の「経済学」がイデオロギーでないのは、一言にしていえば、それらが社会性を喪失している、つまり社会的意味をもたないからである。その担い手(「経済学者」)にそくしていえば、かれらが社会的意識を欠き社会批判的な立場を放棄して、体制に順応するという社会的行為だけを重視しているからである。いうまでもなく、イデオロギーでない「経済学」は、まさにその事実によって社会的、あるいはもっと限定的に政治的機能を積極的に果たしうる。たとえば、kill-ratio というような「技術的」用語が政治的軍事的意味解釈をすりぬけて、すんなりと「経済学」にはいりこんでくるのである。これは「経済学」そのもの、あるいは「経済学者」集団がいちじるしい社会的害悪をまきちらす可能性を顕現させている。

同様の視点からロビンソンはつぎのような名言をのこしている。「プロパガンダの要素は、われわれの主題が政策に関連をもつかぎり、経済学にはつきものである。政策に関連がないのならば、経済学には何の興味もありえない。及ぼすところの実践的な効果を度外視して、それ固有の魅力の故に探求するに値するような主題を望むひとは、経済学の講義などには出てこないだろう。そのひとはたとえば、純粹数学をやるか、それとも鳥類の生態を研究するかするにちがいない。」([23], p.4)ロビンソンのこの主張をイデオロギーとむすびつけて解釈しているのは熊谷尚夫である。かれはこういつている。「およそイデオロギー的なかわりあいをもちえないような経済理論ほど興味索然たるものはない(それは、毒にも薬にもならない、論理学や数学の練習であるばあいが多)と考えるのが、それこそ、経済学についてのわたくしの最大の『イデオロギー的偏向』にほかならない」と。([5], 5 頁) まさしくイデオロギー不在の「経済学」の否定である。熊谷の解釈にしたがっていえば、ロビンソンの言明は経済学の「脱イデオロギー化」にたいする警告であったともいえよう。そしてこの「脱イデオ

ロギー化」した経済学こそ、上述のアメリカ「経済学」、さらにはその強い影響下に「発展」とげた日本の「近代経済学」にほかならない。この種の「経済学」を操作する「経済学者」は現実の社会に生起する多様な経済現象とみずからの信奉する「経済学」からみちびかれる諸命題とのあいだにいかなる不整合があったとしても—まさに「脱イデオロギー化」ゆえに—そのことになんら痛痒を感ずる必要はないから、社会的にはオポチュニストとして発言する「自由」を享受することができる(オポチュニズムの意味については、[3]参照)。「経済学」に社会的な意味があろうとなかろうと、かれは「経済学者」という「専門人」として社会的に発言し行動しうるのである。しかも「脱イデオロギー化」は経済理論モデルの数理化とともに急速に進行した。この数理化は自然科学、とくに物理学における数学の利用と好個の対照をなしている([4]の第3章を参照)。数学的手法の無批判的「あてはめ」がその特徴であって、数学の方法そのものの評価、メタ数学的な数学的構造分析の吟味はおどろくほどなおざりにされている。日本のばあい、数理化は「マルクス経済学」の一部をもまきこんでいることが特徴であろう。皮肉なことに、熊谷を主要な編集者の一人として1980年に刊行された新版の『経済学大辞典』(東洋経済新報社)は経済学の「脱イデオロギー化」を鮮明にしている(旧版の『大辞典』はいちじるしく規格統一を欠いている分だけ、おもしろく個性的な、啓蒙論文といってよいほどの「解説」をいたるところに収録している)。イデオロギーと密接に関連する経済政策論までも「脱イデオロギー化」にさらされていることを、この辞典は明瞭に物語っている。そうした点でこの『辞典』の刊行は日本の経済学にとってネガティブな意味で画期的な意義をもったようにおもわれる。

(****) ロビンソンはマルクス主義者たちの「神学的論法」をみごとに批判してつぎのように論じている。「マルクスのシステムは建設的批判によって筋ちがいと矛盾から解放されること、また、多くの欠陥があるにもかかわらず、たしかに元のままでも透徹した分析システムとなっていることを、なぜマルクス主義者ははっきりしめさなかったのであろうか。そのわけは、あきらかに、労働価値論がずっとまえから理論でなくなり一つの信条(creed)になってしまったからである。おそらく、一つの観点からすれば、マルクス主義者がこれを弁護するのは正当である。歴史の流れのなかで教義をしっかりと守っている宗教は、理性に力をそがれながらもおおきな団結力と頑健さをしめしてきた。『精神が死滅しても文字は生き残る』。しかし、神学的論法(the theological style of argument)というのは知性を腐敗させる効果をもっているのである。」([21]p.149)ロビンソンがここで「神学的論法」とよんでいるものは、政治学者の丸山眞男が別の視点(日本思想史研究の立場)から「理論の物神化」の帰結としてさりげなく巧みに表現している内容とほぼおなじ認識をしめしているようにおもわれる。([8]参照)

<参考文献>

- [1] 安部隆一[1993]『『価値論』研究』(『著作集』第3巻, 千倉書房)
- [2] 宇野弘蔵[1969]『資本論の経済学』(岩波書店)
- [3] 神武庸四郎[2006]『経済史入門』(有斐閣)
- [4] " [2016]『産業革命の構造』[改訂増補版](一橋大学付属)

図書館 Hermes-ir)

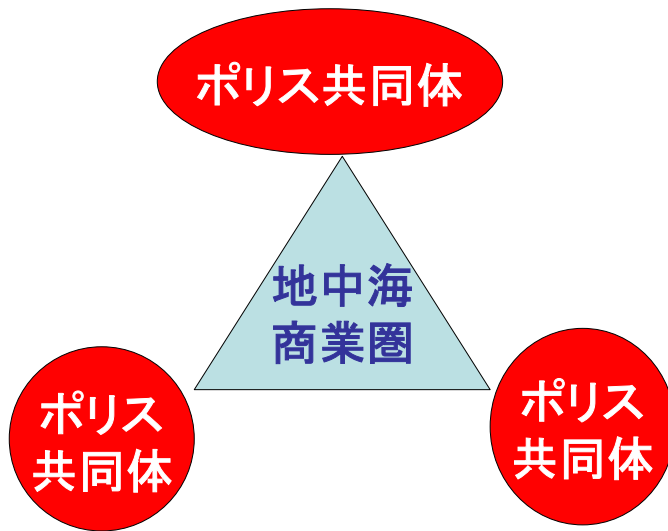
- [5] 熊谷尚夫[1959]『近代経済学』(日本評論社)
- [6] 高橋誠一郎[1929]『経済学前史』(改造社)
- [7] 福田徳三[1930]『厚生経済研究』(刀江書院)
- [8] 丸山眞男[1996]「日本の思想」(『丸山眞男集』第七巻, 岩波書店)
- [9] 丸山眞男[1996]「思想史の方法を模索して」(『丸山眞男集』第十巻, 岩波書店)
- [10] Aristotle[1926], *The Nicomachean Ethics*, translated by H. Rackham, Harvard U. P., Cambridge, Massachusetts.(加藤信朗訳「ニコマコス倫理学」『アリストテレス全集』13, 岩波書店, 1973年)
- [11] Aristotle[1932], *Politics*, translated by H. Rackham, Harvard U. P., Cambridge, Massachusetts.(山本光雄訳「政治学」『アリストテレス全集』15, 岩波書店, 1969年)
- [12] Harrod, R. [1933] *The International Economics*, Cambridge.
- [13] Kamitake, Y.[2012], 'Metaeconomic Theory of Capitalist System and Civilization: From 'Value' to Measure', *Hitotsubashi Journal of Economics*.
- [14] Keynes, J. M.[2013] *The Collected Writings of J. M. Keynes*, Vol.29, The General Theory and after; A Supplement, Cambridge U.P.
- [15] Mannheim, K.[1936], *Ideology and Utopia*, Kegan Paul.
- [16] Marx, K.[1968] *Das Kapital*, Erster Band, Dietz Verlag Berlin.
- [17] Marx, K.[1872], *Le Capital*, Paris.
- [18] Marx, K.[1976], *Capital*, Vol.1, Penguin Books, London.
- [19] Poincaré, H.[1905], *La Valeur de la Science*.(吉田洋一訳『科学の価値』, 岩波文庫, 1977年)
- [20] Ricardo, D.[1951], 'On the Principles of Political Economy and Taxation' in *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Cambridge U.P.(リカードウ著羽鳥卓也・吉澤芳樹訳『経済学および課税の原理』上下巻、岩波文庫、1987年)
- [21] Robinson, J.[1951], 'The Labour Theory of Value' in *Collected Economic Papers Vol. I*.
- [22] Robinson, J.[1964], *Economic Philosophy*, Penguin Books.(宮崎義一訳『経済学の考え方』、岩波書店、1966年)
- [23] Robinson, J.[1975], 'Marx, Marshall and Keynes', in *Collected Economic Papers*, 2nd ed., Vol.2, Basil Blackwell, Oxford, 1975.(都留重人・伊東光晴訳『マルクス主義経済学の再検討』、紀伊国屋書店、1956年)
- [24] Russell, B.[1919], *Introduction to Mathematical Philosophy*,

George Allen & Unwin, London.(中村秀吉訳「数理哲学入門」『世界の大思想』26、河出書房新社、1970年)

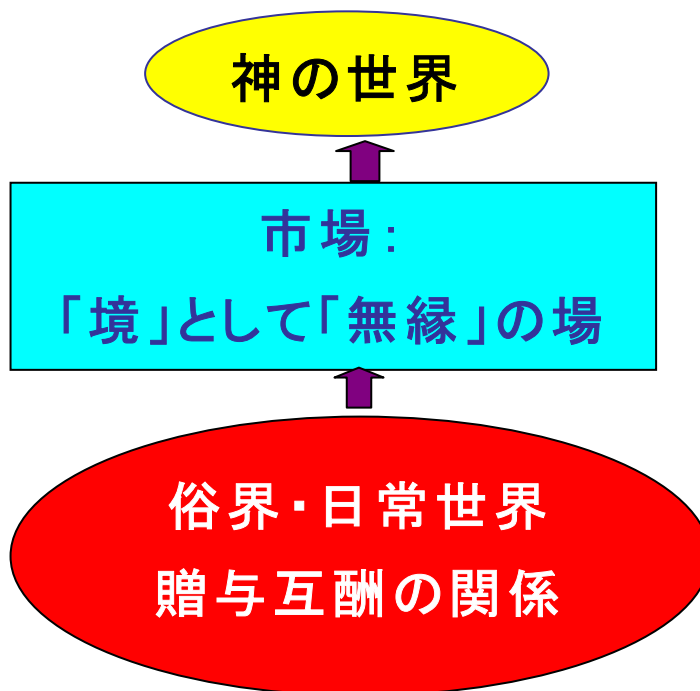
[25] Russell, B.[1946], History of Western Philosophy, George Allen & Unwin, London.(市井三郎『西洋哲学史』みすず書房、1969年)

付図:コイノニアとインテルムンディアとの色分け

① 古代の地中海世界



② 網野善彦のえがく(網野著『日本の歴史をよみなおす』より)日本の中世世界



<付図追加>

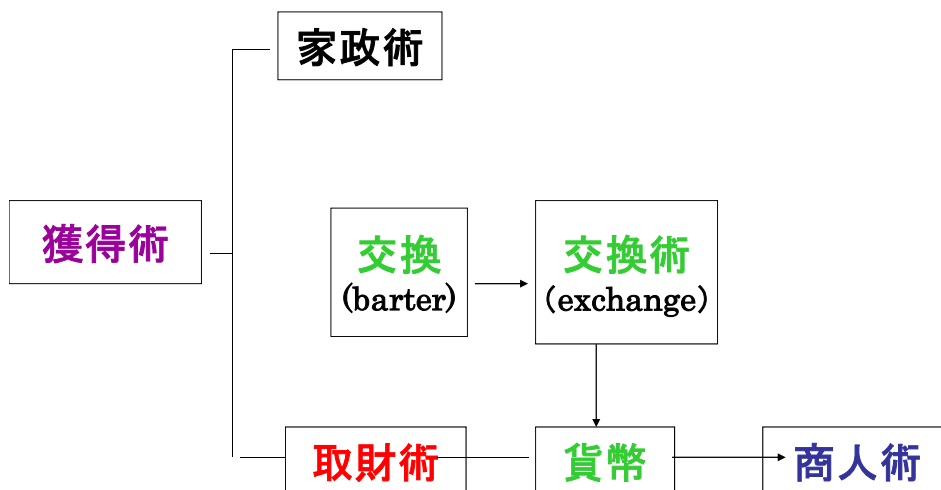
アリストテレスの用語法:

① 獲得術の下位概念

獲得術(κτητική)

- κτητική :
- → οίκονομία (家政術)
- → χρηματιστική (取財術)
- ἀλλαγή [交換、Barter]
 - μεταβλητική [交換術]
 - νόμισμα (貨幣、通貨)
- → καπηλική (商人術)

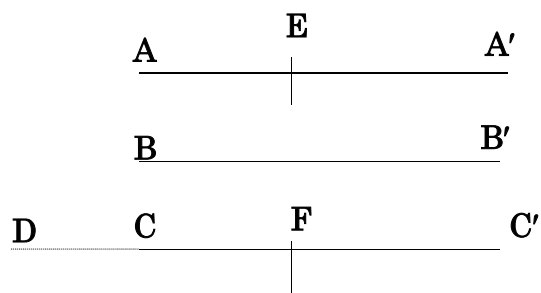
② 関連図



③ 「算術的比例」

「算術的比例」と「費用原則」

• $AA'=\Sigma$, $AE=\Delta$, $DCC'=\Gamma$, $2\Sigma=\Delta+\Gamma$



—以上—